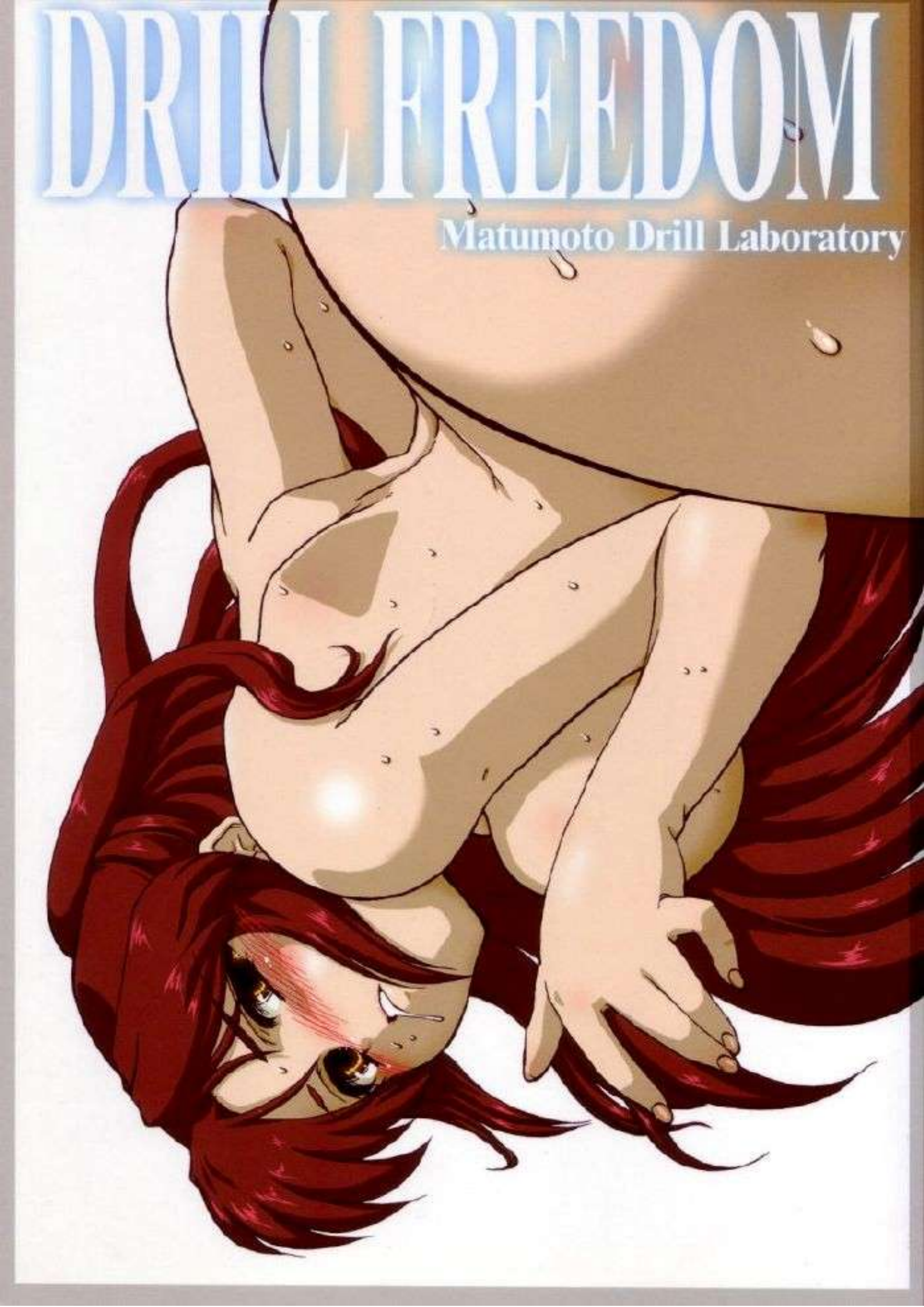
DRILL FREEDOM

Matumoto Drill Laboratory



目　次

1……フレイ・アルスター＊
2……落花尋問＊
4……魔乳搾乳＊
6……美家昇天＊
8……飲尿令嬢壱＊
9……飲尿令嬢弐＊
10…ふらがくんのいちにち＊
12…魔姦婚淫＊
14…淫魔暴虐＊
16…ラクスたんとハロ
17…ラクスたんとアスランきゅん＊
18…隷従奉仕＊
20…虜囚凌辱＊
22…廃棄妊婦＊
23…あとがき

落花尋問

「あなたたち！　私を誰だと思っているの！」
「はて。どなたでしたかな？」
「私はアルスター事務次官の娘よ！　フレイ・アルスターなのよ！」
「ふうむ。おい、知っているか？」
「存じません。テロリストのくせに事務次官の娘を語るとは不届きですな」
「たしかに。事務次官は前の戦闘で名誉の戦死をなされたと聞く」
「なっ…あ、あなたたちが！　あなたたちが殺したんじゃない！」
「戦争に犠牲は付き物だ。それに、君たちのほうがよほど酷いと思うがね」
「どういう意味よ！　皆はどうしたの！　アークエンジェルはどうなったの！」
「船籍不明の不審艦の乗組員は全員拿捕した。皆協力的でね。自白したよ」
「そんなはずないでしょう！　この人殺し！　手錠を外しなさいよ！」
「むろん民間人は全員送還したよ。残ったのは君のような軍人だけだ」
「えっ……わ、わたし、軍人じゃない…軍人じゃないです…」
「うそを言ってはいけないな。コンピューターには君の軍籍が記載してあったが」
「ち、ちが、違うんです！　これはなにかの間違い…そうだ、艦長、
マリュー艦長に会わせてください！　そうすれば判るはずです！」
「ふむ…艦長が証言すれば、君が軍人でないことが判る筈だと？」
「そうです！　私は軍人になるつもりなんて無かったんです！」
「記録によると君のクラスメートも軍籍に入っているようだが…」
「し、知らないっ！　私は知りません！　なにかの間違いです…艦長が…」
「うーん…困ったな。今のところ艦長は人と話が出来る状態ではないんだが」
「とにかく、まずは身体検査から始めるというのは如何でしょう？」
「くくく。殺しちまえばいいんですよ。こんな女」
「えっ…　きゃああっ！　な、なにするのよ、触らないでっ！　あっ、そこはっ…
どういうつもりなの！　ちょ…止めなさい！　訴えるわよ！」
「テロリストがどこに武器をもっているか判らないからね」
「そんなっ！　そんなこと…ひっ、ひいいっ！そ、そんなところ…触らないでぇ…」
「んん？　なんだこれは？　小型爆弾かな？」
「いやっああっ！　止めないと殺すわよ！　キチガイ！　変態！」
「威勢のいい女だな。面白い。ザフトに逆らった人間がどうなるか教えてあげよう」
「はあはあ……いやよ…いや……だれか…助けて…」

改造人間が私に触らないで！
くっ
止めなさい！やめてったら！あんた達なんか死んじゃえ
コーディネーターだからって…な、何を…してもいい訳じゃあ！
そ、そこは…ひいいい！
やめ…いやあああ！
たすけ…
ガクガク
ちゅ
ちゅ
ぬりゅ

む、胸がっ私の胸がぁ！
吸われちゃうぅ！きょ、今日も！おっぱいがあぁあ！
こんな…惨めなぁあわたし…艦長なのにぃ…
カメラ…撮られてるぅう…
ひっ、ひぃいいいい！ミルク！絞らないでぇえ！
ビクビクッ
ビクッ
ドイブイ

『私ことマリュー・ラミアスは、鬼畜で冷酷な殺人者です。
何の罪も無い民間人をテロリストに仕立て上げました。
自らの罪を認め、この身体全てをザフトに捧げます。
今後の人生を牝牛となって償うことを誓います』

巨大な乳房が張ってたまらない。『マリューは屈辱に耐えながら、処理を待った。手足が自由であれば自分で乳を握って滅茶苦茶に揉み狂いたかった。改造された肉体は、軍人の規律など消し飛ぶほどの疼きと性感を与えてくる。

『私は…わたしは……
アークエンジェル艦長代理…
マリュー・ラミアス…』

ピンクの霧がかかった意識の中、せめて自分の存在を確認しなければ狂ってしまいそうだった。クリトリスを剥き出しにされ、ぱっくりと開いたままになった秘苑にめり込んだ巨大ローターが試験的に蠢く。

喉から搾れたうめき声が漏れた。そのショックで巨大に勃起した乳首からミルクが染み出る。乳が溜まり、パンパンに張っている胸は容赦なく残酷な快楽を伝える。

ひっ、とうめいて身体を引き攣らせる。もう我慢できなかった。上目遣いに、カメラに向って懇願した。胸を、私の罪深いおっぱいを絞ってください、と。

胸に取り付けられている強力搾乳機が作動した。マリューの乳首が真空に引かれて膨れ上がる。勢い良くミルクが噴出し、マリューはむっちりとした肉付きの腰を振りたてた。よがり泣きと悔し泣きの入り混じった凄絶なよがり声を上げる。

かつての毅然とした軍人の面影は残っていない。ここにいるのはただ胸を絞られて絶頂のあまりアナルストッパーをひり出す牝牛だった。

殷間のローターが唸り、身体の奥から昏められる感覚に、マリューは泣いた。同時に冥い快楽が襲ってくる。

ミルクがびゅぶっ、とはねる。だが彼女は死ぬことは許されない。自分の身柄と引き換えにして、残りの乗組員の命を確保していたからだ。

『私だけが犠牲になれば……』

魔乳搾乳

フレイに見られていることにも気づかずに、マリューは魔乳を揺らして絶頂した。

すごいいいい！
おなかでっ暴れてるうう！
すごっいい！
ドドドドド
ぶしっ
もっと激しくぅ
突き倒してぇえ！
壊してぇ！
私のおまんこ、
めちゃくちゃにしてぇ！
ガクガクガク
忘れさせてっ
人間…だった…
こと…ぅああ！
ぴゅるっ

美畜昇淫

マリュー・ラミアスは自らが噴出したミルクの中に顔を突っ込み、すすり泣いていた。
マリューの搾乳の様子はネットにてプラント全土に配信され、ナチュラルの牝牛として有名になっている、と兵士があざ笑っていた。
もう、連合にも戻れない。異常に膨れ上がった胸からピコーピコー母乳を搾り出される姿も
膣からローターを噴出して絶頂する姿も、
そしてあまりの快感に脱糞してしまった姿も、
全て余すところなく記録され、報道されている。
毎日続く搾乳を心のどこかで待ち焦がれていた。
脱を戒められ、動かない身体が快楽を要求した。
我慢などできなかった。夜一人になると、敏感な乳首を床に擦りつけてオナニーした。自分の乳首を噛んだ。ミルクも飲んだ。甘かった。
そのままイッてしまい、その様子もまた録画されていた。
搾乳が終わり我に返ると声を押し殺して泣いた。
死んでしまいたかった。もう人間として限界だった。このままでは、身体の精神も改造されつくされるのではないか、と思った。
『ムゥ……ナタル……私…もう駄目かも……』
訪れた。
流動食による強制的な食事が終わると、実験室にガスが噴霧された。嫌でも吸い込んでしまう。
乳首が疼きだす。身体中が火照り、自分の意志ではないのに股がとろとろと濡れていく。
また辱められるのか、と官能に溶けていく頭でかすかに思った。もういいわ。好きにすればいい。
どうせ、もうなにも失うものはないんだから…。
実験室の扉が開き、マリューは自分の絶望が甘すぎたことを思い知った。
顔から血の気が引く。しかし、興奮した身体は紅潮し、快感の予感に唇が咬ぶ。
『ひ、いいい…そ、それは…そんな…それだけは…いや、いやァァァァッ!』
バクゥ・ゼロの股間には強力なバイブレーターが装備されていた。胸だけが巨大な、しかし均整の取れた身体をガクガクと震わせ、なんとか逃げようとするマリュー。ゼロの電動バイブレーターがその秘部を伺う。
太股に力が入らない。ガスのせいだ。恐怖で狂いそうになっていた頭にもやがて朦朧とした快楽が
ゼロのバイブが羽音のような音を立てる。
振動が次第に大きくなり、ドロドロに濡れた花弁に押し当てられる。
『ひぐッ……』
マリューは口の端から泡を飛ばし、痙攣した。
バイブは入り口でとどまっている。愛液がかき混ぜられ、ジワリとした振動が襲う。
焦いて欲しかった。身体を無茶苦茶にかき混ぜられて、いき狂いたかった。乳首からミルクがにじむ。脂汗が浮かび、マリューは人を辞めるかどうかをぼんやりとした頭で考えた。
私、頑張ったもの……。
准将閣下、もう、いいですよね……私……。
マリューは恍惚とした顔で、自ら蜜腰を煽った。
ズブズブとバイブがめり込む。太股がピーンと突っ張った。バイブが膣に収まると、早速勢いよく振搾する。腰がガクガクと痙れ、舌を突き出して満足そうな悲鳴をあげる。
『ひっ、ヒィィっー　す、すご…
あが、あかがが…し、死ぬ…こ、殺してよおっ!』
がふっ、と喉から息がしぼりだされ、実験室にマリューのよがり狂う声が響いた。
この映像はナチュラル側にも送り届けることになった、と誰かが言っている。
狂いたかった。今はただこの振動と快楽だけを感じていたい。
バイブがアナルを犯す。
ぶびゅっ、と蜜があたりに飛び散り、勃起した乳首からはとめどなく乳が溢れていった。
マリューは幸せだった。

飲尿令嬢

私は土下座しました。
必死で謝る私にザフト兵達は冷たく言いました。
「ナチュラルが生意気にドレスかよ」
唇をかみ締めて服を脱ぎ、土下座し直します。
ひそかに期待しました。身体には自信があります。
「ちゃんと口を開けて謝れよ」
口を開けた途端、じょぼじょぼと生ぬるい液体が注がれます。
「飲めよ。本当に謝るつもりなら出来るだろう？」
何度もむせ返りそうになりながらおしっこを飲みました。
「その目が気にいらんな」
ゴッ、と鈍い音がして、私は地面に転がりました。

『ゆるして…
こ、殺さないで…
艦長みたいにしないで！
何でもしますからっ！』
ザフト兵は笑いました。
「まだ自分だけは
助かろうとしてるぜ」
「くそブタめ。
そうやって俺たちの
仲間を誘惑したんだな」

「お前みたいな売女にはこれで十分だ」
頭から黄色く臭う液体を浴びせられました。
私の涙とおしっこが混ざって、丸裸になった身体を垂れていきます。
なぜ私だけがこんな目にあわなければならないのでしょう？　謝っているのに、こんなひどいことをされるなんて…
キラがこいつらを皆殺しにしていればよかったのに。私は髪から液体をぽたぽたとこぼしながら泣きました。

ふらがくんのいちにち

ふらがくんは、おんなのひとがだいすきです。やわらかくていいにおいがするからです。
まいにちおまんこにちんちんをいれています。とってもたのしいです。
おんなのこにちんちんをいれるととってもきもちがいいんだよ。
きょうもなかよしのなたるちゃんとみりぃちゃんとせっくすしています。
いまはなかよしだけど、さいしょはにらまれたりばかにされたりしました。
でも、ふらがくんのにほんのちんちんでにちにちじゅうひすとんしてあげると、
みんなとってもよろこびました。うれしいな。もっとしてあげたい。
まいにちまいにちひすとんしていると、みんなふらがくんがすきになったみたい。
なかにはあわをふいてうごかなくなっちゃったおんなのこもいるけどね。えへっ。
いまではふたりともなかよしで、ずっときすをしたりおっぱいをすってすごしています。
おまんこをこすりあわせたりもします。とってもしあわせそうだよ。
それをみているとふらがくんはがまんできなくてちんちんをいれてしまいます。
ふれいがしいい、とさけび、みりぃがきもちいいといいました。
ときとき、なたるがしょうきにかえると、なきてげびながらころして、といいます。
なんでぼくはここにいるんだっけ…。わすれちゃった。
そんなことよりおまんこがぎゅってなるときもちいいんだよ。
ふたりにせいえきをかけてあげると、うれしいんだって。
ふたりとも、すごくきれいだよ。おまんこのなかにもだしてあげるね。
おしりのあなにもいれたいな。もっとよろこばせてあげたいな。
でも、ちょっとでんねん。まりゅーともおまんこできるといいのにな……
こんど、おねがしてみよう。あっ…またでそう。ふたりとも、うけとってね。
ふたりがきぜつしちゃったよ。でも、やめてあげない。ずっとずっと、こうしていたいな…。

唾…舌ぁ…からめ…穴がぁ…めくれるぅう！
くひぃい！お尻、ソコ…お尻ぃいい！激しいいい！
しぇ精子飲ませて！のませてぇえ！
ぐはっ！
あたしおまんこぉ！おまんこにぃい！
イヤ！副長！あたしが！あたしが飲むにょぉお！

ひっ…そ、そんな物!!入る訳な…き、キラは!!キラはどこなのよ!
イヤ!
嘘!これがキラ?
ッテヨコシ
ッタシノウ!
ホマーモナー!
さ、裂けるうう!あそこが!おまんこが裂けちゃうう!
んぐ、

「身元保証人がいないのなら、牝奴隷になってもらうしかないな」
ザフトの軍人は冷たく言い放ちました。
私は必死で自分を救ってくれる人間を考えました。
キラ。そうだ。キラなら助けてくれるかもしれません。
彼はコーディネーターです。捕まったとしても、殺されていないはずです。
私だけがキラの苦悩を理解してあげることができたのです。
キラも私が好きなのです。この前キラのものを舐めてあげました。
飲んであげました。彼も私の身体を気持ちいいと言ってくれました。
私にはそれだけの価値があるんです。無能なクラスメート達とは違うもの。
だから、キラは私を助けてくれるはずです。
「キラ…ああ、彼か。彼の知り合いかね」
キラはやっぱり生きていました。キラはきっと私を助けてくれるはずです。
「彼も君のことが好きだそうだ。結婚でもすれば、君もザフトの一員ということになるな」
私はキラと結婚します。そして助かるのです。

「結婚式の契りでもしたらどうかね」
私は狂ったように叫びました。ザフト兵たちはにやにやと笑っています。
キラは戦いで身体を無くし、今はペットロボットの身体に脳だけが入っています。
キラのために用意したドレスが破られました。
裸体が露わになると、薬を打たれました。
泣いて抗う私は、自分のあそこがぱっくりと開いて濡れていくのを感じました。
キラが私のあそこに押し当てられます。ザフトの人たちは目を血走らせて笑っています。
私のあそこは剃り上げられ、キラを阻むものはなにもありません。
ピンク色の襞のなかにキラが埋まっていきます。入るわけがありません。こんなもの、入るわけがない！
無理矢理キラが私の膣にねじ込まれました。私は息も絶え絶えになり、白目を剥きました。後はよく覚えていません。

サイが入ってきたとき、ぎょっとするような笑みを浮かべていました。
「俺、コーディネーターになったんだぜ」
私は内心びくびくしながらも、サイに助けを求めました。キラを人
れられて奪けてしまったあそこがズキズキと痛みます。
「へえ。それで、俺に身元引受人になってほしいんだ」
私は精一杯媚びた顔で頼みました。もうサイしかいないのです。
私は心の底から反省しました。サイは私の婚約者です。私はサイ
のことが好きだったのですから。
「ははは。タダとは言わないよな？　キラにはやらせたんだもんな」
私はよたよたと立ち上がり、サイの足にすがり付いて懇願しました。
サイの股間のチャックを開けました。サイは止めません。
そうです。私の魅力なら、サイだって…
「凄いだろ？　肉体改造実験もされたんだ。どうしたんだい？
咥えてくれるんだよな？」
人並みはずれた肉棒でした。私の腕ほどもあります。私は足がガク
ガクと震えました。そそり立った肉棒には、凶悪なイボイボが生え
ています。
「まさか、キラには出来て、俺にはできないなんてこと、ないよな」
私は顎が外れそうになりながら、サイのそれを咥えました。
亀頭を口に収めるだけで精一杯でした。

「やあフレイ。
久しぶりだね。
元気かい？」

サイはニコニコと笑いながら私の頭を押さえつけます。
喉の奥まで突き入れられ、私は吐きそうになります。
サイは止めてくれません。私は涙と鼻水を流し、耐えました。
サイの肉棒は恐ろしく固くて大きく、私は顎が痺れてしまいました。
「気持ちいいよ。フレイ、君とこんなことが出来るなんて。
やっぱりコーディネーターになれて良かったよ。
じゃあ出すから全部飲んでくれよ」
どびゅう、と白濁した液が喉の奥で弾けました。
ごぼごぼと私の口の中に止め処なく溢れていきます。
「あははは、いいよ、その顔。バカみたいだ。
鼻からも俺のを噴出してるなんて、フレイらしいよ。ははは。
これで窒息したら本物のバカだよね。目からも滲んで来たなあ。
死にたくなかったら、飲むしかないよな」
喉に絡まる液体を飲み干すと、私は失神しました。
げほっ、げほん…私はひどくえづき、口の端から精液を垂らしながら
サイに命乞いをしました。私は服を脱いで精液にまみれながらサイを
誘惑しました。
「嬉しいよ、フレイ。そんなに俺のことが…」
サイは優しく私のあそこを触り、微笑んでくれました。
「んなこと言うわけがねえだろう！　この牝ブタがぁ！」
ミリミリッと音がして、サイのこぶしが私のあそこにめり込んでいき
ます。
激痛にうめく私の頭を押さえつけ、サイはたからかに笑いました。
それは今までに見たことも無いような晴れやかな笑顔でした。

ズポポポ
ははは！俺のチンポの味はどうだい？こうして欲しかったんだろ？
全部飲まないと溺れ死ぬぜ！
ミチ
ミチ
あっ！
あ、お願い…助けて！助けてサイのこと好きだから！
だから！だから！
裂けちゃうう！あそこが！裂けルうう！ひぎいいいい！
キラ…

「ああんっ♥すごいですぅ。
ラクスのあそこのお尻のあなも
ハロさんたちで一杯になってます♥」
「ラクス、オマンコスキケ？」
「あはっ♥　気持ちいいから大スキですわ～
あきゅううん、イッちゃいそうですぅ～♥」
「イケイケイッチマエ」
「んもう、地球軍の戦艦ではハロさん一個しかなかったから
も～ヨッキュウフマンがいっぱいでしたのよ♥」

あすらん様も一緒にしよっ♡
ぱっ
ドキドキ
う、うん
あすらん様のおちんちんおっきー♡
ぷるん
んっ
ふっ
ちゅくちゅく
ぎゅ
ぎゅ
もっとキモチよくしてあげますね、
えっ？
ぺろぺろ
ぺろ
ぺろ
ぺろ
よかったね♣

しょうがねえなあ
ちっ、こんな豚しか残ってねぇのかよ
あぐぅ
ぱぷん
ずぶっ
私は卑しい牝奴隷ですっ！どうか…お情けを！中で…中で出してください！
ひぁあ…
おら、怠けてると実験室送りだぞ！

隷従奉仕

私はコーディネーターの子供を産むために奉仕しています。
毎日、睡液が枯れるまでフェラチオしたり、媚薬を打たれてよがり狂ったり、
身体中に精液をかけられたりしています。失神しても目が覚めるまで責めつづけられます。
私のあそこは真っ赤に腫れ上がるまで使い込まれ、お尻のあなは流腸されすぎて
中身がはみ出しています。
ザフトの人が命令することは、どんなことでもやらされます。
少しでも反抗するとおしおきされるのです。自分の手をあそこに入れたこともあります。
「いつまでたっても舌使いが上手くならねえな」
髪の毛を引っ張られました。私は心の底からわびながら、カリ首を舌で舐め上げました。
尿道に舌をいれ、中を吸い上げます。
「べろ…ぷあっ、ちゅぱっ…おいしい…わたしは淫様の奴隷です。
フレイのおまんこも、お尻も全部使ってください。わ、私を妊娠させてください…
き、気持ちいいですか？　ん、んん…んぐぐ…お願いします…」
そうやっておねだりすると、自分でも信じられないぐらい感じてしまいます。
何回もフェラチオをして覚えたテクニックを使い、顎が痺れるまでご奉仕すると、
ペニスが膨れ上がってきました。
「へへ、全部飲めよ」
むせ返るような臭いがして、ねばつく粘液が射精されました。喉を鳴らして飲みます。
今ではこの臭いを嗅ぐと快感でぼうっとしてしまいます。
「はい…ごく…おいひいれふ…もっと飲みたい…」
ご主人様はそのままおしっこをしました。それも零さないように飲みます。
「そういやあ、裏切り者のコーディネーターが処分されたってよ」
「ふーん。さて、次はケツだな。おら、力抜けよ」
太いものがあらあらしく後ろを犯してきました。吊るされた身体がギシギシときしみ、
胸がたぷんたぷんと動きます。そんな光景をみてザフトの人たちは興奮するのです。
「うっ……うあっ……うあああ――ん……」
私はなぜか泣いていました。誰かの顔が脳裏に浮かんだのです。
「へへ、ここんところ従順すぎてつまらなかったんだ。おら、もっと泣け」
ザフトの人は髪の毛を掴んで口の中にペニスを突っ込みました。
喉の奥まで突かれながら私は涙を流しました。
しばらくすると気持ちよくなって、そんなことは忘れてしまいましたが…

「お願いします…
私を妊娠させてください…」

ああん？
オーブがなんだあ？
このレジスタンスの
淫売女が！
ヒャーハハハッ！
ナチュラルなんぞ
皆殺しにしてやるぁ！
おらあ！俺のチンポを
喰らえええ！
ぐはっ
ひぐうう！
わ、私は…
オーブの…
ひぎっ！ぎいいい！
いっい
いあ！
だめぇ！
でちゃうう！

虜囚凌辱

イザーク　「なんだその目は！　バカにするなよこの
　　くそナチュラルが！」
カガリ　　「おまえら！　捕虜の虐待は条約違反だぞ！」
ディアッカ「ナチュラルには条約なんかねえよ」
なおも殴りかかろうとするカガリを、イザークが蹴り
飛ばした。
イザーク　「この強化された新人類、コーディネーター
　　に勝てるわけないだろうがぁ！」
レジスタンス服を経々と破り捨て、股を力任せに広げる。
カガリ　　「ぎゃああッ！　や、やめろぉぉ…　うぐっ！」
ディアッカ「ナチュラルでも綺麗なマンコしてやがるな」
イザーク　「レジスタンスなんぞぶっ殺しちまえばいいん
　　だよ！　どっかのお姫様だってんなら話は別
　　だがなぁ」
カガリ　　「くっ…わ、私は…」
イザーク　「だまれぇ！　けけけっ。指を突っ込んでやるぁ。
　　ヒャーッハッハッハッ！」
いきなりイザークの指がズボーッとめり込んだ。
カガリは圧迫感に息を吐く
カガリ　　「がふっ…ぐ…が…た、助けて…」
ディアッカ「おいおい、まだ壊しちゃもったいないぜ。
　　少しは楽しませてくれよ」
イザーク　「中はぬるぬるしてやがる。と思ったら血
　　かよ！　けけけけ、こいつ処女だったのか！
　　てっきりレジスタンスどもとズコズコヤリ
　　狂ってるかと思ったけどよ！」
カガリ　　「あぐぐ…い、いた…痛いよ…や、やめて、
　　やめてっ！　ひどいよ…」
なおもこねくり回すと、破瓜の血に混ざって透明の蜜
が溢れてくる。悲しい女体の防衛本能だった。

イザーク　「ひひひ、ひーっひっひっ！
　　みろよ、こいつ感じてやがるぜ！
　　やっぱりただのド淫乱のテロリストだ
　　よなあ！」
カガリ「ち、ちが…やだあ…こんなのひどすぎるよ…
　　痛いよ…だ、たすけて…お父様」
イザーク　「ひひひっ、原液のグリセリンを喰らえ！」
カガリ「がぐっ…ぐぐっ……お、おなかが、おなかがぁ…
　　焼ける…う、うぐぐ…」
イザーク　「許可無しに少しでも漏らしたら死刑！
　　おいディアッカ、突っ込むぞ！
　　ナチュラル退治だ！」
ディアッカ「おう。おれのバスター砲を受けてみな」
おなかをギュルギュルと鳴らすカガリをひっくり返し、
秘所をさらけ出させる。ディアッカはシャツの上から
白い乳房を乱暴に握った。恥ずかしい格好を恥じるま
もなく、カガリは苦痛にうめいた。
カガリ　　「いやっ！　ぐ、うああ…お、おなかがぁ…」
イザーク　「腹の痛みを忘れさせてやるぜ。そら！」
ずぶぶっ、とイザークの凶暴な肉棒がカガリの小さな
秘裂を襲う。無理矢理に広げられた陰唇が痛みと屈辱
に震えた。
カガリ　　「ぐっ！　あひ、あぐぅ　が、がが…
　　あがががうぁぁぁ――っ！」
破瓜のときとは比べ物にならないほどの激痛に狂った
ように叫ぶカガリ。
床を爪でかきむしってなんとか逃げようとするが、
イザークに押さえつけられる。
ディアッカ「これじゃあすぐに漏らしちまうな。死刑に
　　なりたくないだろ？　俺が栓をしてやるよ」
スレンダーな身体に脂汗を浮かべ、かはっ、と息をつい
たところに固く窄まったうしろの穴がこじ開けられる。
カガリ　　「あ…ぐ、ああああ…し、死ぬ…しんじゃう…」
みりみり、とディアッカの肉棒がカガリのアナルを犯す。
スザーク　「おお、なかはキツくていい感じだぜぇ」
子宮口を突き破られるほどの勢いで突き入れられる。
カガリは泡を吹いて気絶した。

あんなにいっしょだったのに

夕暮れはもう違う色

最終報告
フレイ・アルスター（二級テロリスト）・15歳
スパイとして告発。
無償ボランティアとして慰問用性処理要員となる。
コーディネーターの母体としては不適切。
妊娠中絶を5回。のちに精神障害にて廃棄。
他のテロリストと同じく、廃棄物処理場に放置した。

せめてこの月明かりの下で静かな眠りを
「うふふ…さあ…私の赤ちゃん…
私と一緒に、コーディネーターをやっつけましょうね…
自由という名のガンダムに乗って…
あなたは、きっとパパに似て強い子になるわよ…」
生ゴミに埋もれながらフレイはおなかをさすった。
月が出ていた。フレイには、それが自由への道に思えた。
「あは、動いた…。うふふふふ、あはははは。
あはははははははははははっ」
追加項目
本人の強い希望により胎内にハロを挿入。
当人は妊娠したと思い込んでいる模様。
本件は以上。

あんなに一緒だったのに……夕暮れはもう違う色…

ありふれた優しさは、君を遠ざけるだけ
冷たく切り捨てた心は、彷徨うばかり…
そんな格好悪さが、生きるということなら
寒空の下、目を閉じていよう…

あんなに一緒だったのに
言葉ひとつ通らない。加速していく背中に今は…
あんなに一緒だったのに、夕暮れはもう違う色
せめてこの月明かりの下で…静かな眠りを…

運命とうまく付き合って行くならきっと
悲しいとか寂しいなんて言ってられない
何度もつながった言葉を無力にしても
退屈な夜を潰したいんだね

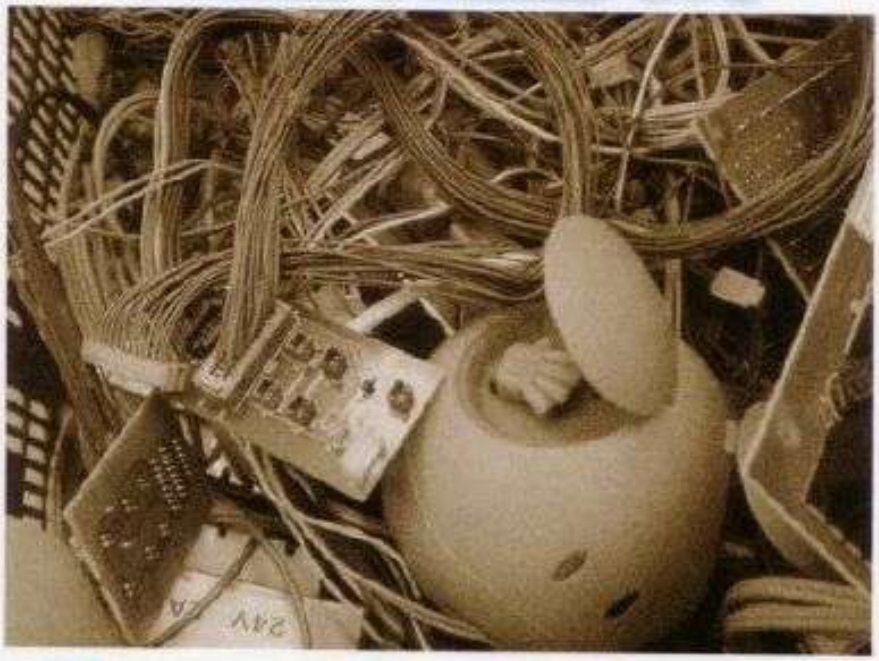
あんなに一緒だったのに
ふぞろいな二人に今、たどりつける場所など無いんだ
あんなに一緒だったのに、初めて会う横顔に
不思議なくらいに魅せられてる、戸惑うくらいに…

心はどこにいる？　どこに吹かれている？　その瞳が迷わぬように

あんなに一緒だったのに
言葉ひとつ通らない！動き始めた君の情熱、
あんなに一緒だったのに！夕暮れはもう違う色…
せめてこの月明かりの下で…静かな眠りを……。

発行：桧本ドリル研究所
誌名：ドリルフリーダム
連絡先：
htm

DRILL FREEDOM



Matumoto Drill Laboratory